二〇一七年一月二二日　（日）

「はじめてのキリスト教」説教要旨

友、兄、そして神

（ヨハネ一五・一五ほか）

「あの人」がついに大統領になる。一昨年の六月、出馬表明をした時点では彼は衆目認める泡沫候補に過ぎなかった。しかし彼はただの暴言王ではなかった。ビジネス、テレビ、果てはプロレスのリング（！）で鍛えた狡猾さと老獪さを兼ね備えた彼は権謀術数の限りを尽くして勝った。そんなトランプ大統領、就任式ではリンカーン大統領愛用の聖書に彼自身の聖書を重ねて宣誓をするという。聞くところによれば必ずしも聖書に手を置く必要はないそうだが伝統は今回も引き継がれるようだ。だが宗教者として大切なのは儀式よりも中身。彼が真に神を恐れるクリスチャンであるかはこれからの行動が証明するだろう。木は実によって見分けるのだから。閑話休題。今朝はイエスとはどのようなお方なのかということについて三つのことを考えたい。

一、関係においては「友」

先ほど読んだ一五節にはイエスが弟子たちの事を友と呼んだことが記されているが、福音書を読めばイエスがフレンドリーなお方であったことは明白である。イエスはあらゆる人とつながろうとされた。社会の周辺に追いやられた、病む人や貧しい人にも、イエスに興味を抱いた富める青年にも、はたまたザアカイのように地位を利用して不正に蓄財をしている男にもイエスは近づき、ご自身の方から声をかけられたのである。しかしイエスが弟子たちを友と呼んだ訳は何だろうか。聖書には「なぜなら父から聞いたことをみな、あなたがたに知らせたからです。」とある。確かに友であればそこには胸襟を開いた交わりがある。腹心の友（原文では胸の中の友）という言葉もあるとおり、胸の内も、腹の内も割って話せる、それが真実な友である。イエスは私たちに父のみこころを余すところなく知らせてくれる友なのだ。

二、法的には「兄」

次にローマ八・一五にはイエスを信じる者は神の子となり、神を父と呼ぶと書かれている。興味深いのはこの「子としてくださる御霊」とは直訳では「養子の霊」であることだ。つまり私たち人類は罪によって神から離されていたが、イエスを信じることにより、神の家族に養子縁組をすることになったという意味になる。神は父であり、そのひとり子はイエスだから、イエスを信じる者はイエスを兄と呼ぶことが可能なのである。更に養子となった以上、私たちはキリスト同様、神の豊かな祝福の相続人になれるのであり、その豊かな祝福とはイエスが経験した死に打ち勝つ「いのち」、永遠のいのちとそれがもたらすあらゆる良きものである。もし人がイエスを信じるなら、その人はイエスと一緒に父の神の相続を受け取る特権に与れるのである。

三、本質においては「神」

しかし、いつも、すべての人と繋がることは生身の人間にはできない。また死んだ後によみがえって、自らが死に対する究極の勝利者であることを証明することは人間には決してできないことである。そう考えるとイエスを単なる人間という枠に押し込んで理解するのは無理がある。実際聖書はイエスを徹頭徹尾人間として描写する一方で、ヨハネ一・一のようにことば（ギリシャ語では「ロゴス」）と呼ばれるキリストは神の本質を持つものだと断言している。仮にイエスが普通の人間に過ぎなかったら、その与えるインパクトはこの世に留まる。しかしイエスが神である以上、彼は私たちが解決できない永遠の問題、即ち罪と滅びの現実に決定的な解決を与え、私たちのいのちを永遠のものに作り変えてくださるのである。

＊　＊　＊

思えば四十年前の大統領選も「大番狂わせ」だった。混戦の予備選を制し、フォード大統領を破ってホワイトハウスの主になったのは「ジミーって誰さ」と言われていたジミー・カーター。冷え込んでいた経済を浮揚させる困難、また元サブマリナーでありながら軍の使用に消極的な平和主義者の外交政策は弱腰に見えたのだろう、四年後あのレーガンに敗れた。しかし大統領退任後、彼は民間レベルでの積極的な平和維持活動に取り組んだ。九〇年代には金日成主席との会談によって朝鮮半島の平和維持に貢献し、二〇〇二年にはノーベル平和賞を受賞した。彼を支えているのはキリストへの信仰である。一昨年からがんの多臓器転移のための治療を続けているが、なお彼は礼拝に出席し、教師として成人科の教会学校で教えている。九二歳の彼はキリストを腹心の友とし、天国の相続を待ち望みつつ、希望をもって今日も生きている。イエスはまことの神にして、何でも話せる友であり、頼れる兄貴だ。この方を今日信じようではないか。